レノベーション，レザベーション，レファレンス

Renovation　Reservation　Reference

学術情報基盤センター　教授　栗山正光

リノベーションじゃないの？と思われた方も多いだろう。マンションの広告などでよく目にする，改装とか改修という意味の言葉である。最近はインターネット上で無料の辞書が提供され，発音まで聞けるので確かめていただきたいのだが，renovation の re は「リ」ではなく「レ」である。

こういうことを書くと，だったら va だって「ベー」じゃない，「ヴェイ」と書くべきで，そもそも英語の発音をカナで表すのに無理があるのだから，「リ」でも「レ」でも，どっちでもいいじゃないか，とおっしゃる方が必ずいらっしゃる。そうではないのである。日本人はbとvの区別をしないし，「エイ」と書いても「エー」と読む。英語は「エイゴ」ではなく「エーゴ」なのである（発音としては）。だから，vation の部分を「ベーション」と表記するのは抵抗がない。しかし，「イ」と「エ」は区別するのである（方言のことは話がややこしくなるので持ち出さないでいただきたい）。区別する以上，原音に近い表記にすべき，というのが私の主張である。

ちなみに report は「リポート」だが，re は「レ」のローマ字表記なので「レポート」はまだ納得できる。renovation は ri ではなく re であり「レ」と発音するにもかかわらず，わざわざ「リ」ノベーションとねじ曲げているのが許せないのである。

同様に，reservation は「リザベーション」ではなく「レザベーション」だし，reference は「リファレンス」ではなく「レファレンス」である。えっ，そうなの？と半信半疑の方もおられるだろう。ぜひ辞書で調べてください。動詞 reserve は「リザーヴ」だが，名詞形の reservation は「レザヴェイション」と re の音が変わるのである。参照するという意味の動詞 refer は「リファー」，名詞形の reference は「レファランス」となる。

昔，テレビの英会話番組で日本人の先生が外国人講師に「日本ではリザベーションと発音する人がよくいますが，ネイティブの人はそう言わないのですか？」と質問し，「ノー。レザヴェイション」という答えが返ってくるという一場面があった。英語が苦手だった（今でもそれほど得意ではない）私は，「レザベーション」という表記が一般的であれば英語の勉強も多少は楽になるのに，と悔しい思いをしたのである。

しかし，カタカナ語のこうした発音の間違い（あえてそう言わせていただく）は，次に述べる意味の間違いに比べれば大した問題ではない。

「リノベーション」が使われる前に「リフォーム」という言葉が改装の意味で使われていた（いや，今でも盛んに使われているのだが）。英語の reform（これは「リフォーム」で「レフォーム」ではない）は社会や制度などの改革を意味し，部屋の改装などには使わない。では部屋の改装は何と言うかというと，renovation なのである。実は「リノベーション」という語をチラシで見た時，ああ不動産業界にも心ある人がいて正しい英語（発音は間違ってるけど）を使うことにしたんだな，と少し救われる思いがしたのである。

ナイーブだった。その後，インターネット上で「リノベーション」と「リフォーム」はどう違うかという記事を見つけたのだが，なんと「リノベーションは新築の時以上の性能になる工事」で「リフォームは新築の時と同等か以下の性能になる」などと書かれている。開いた口がふさがらないとはこのことである。なぜこんな元の英語とかけ離れた勝手な定義を広めようとするのだろうか。

英語だと思うから腹が立つのであって新しくできた日本語だと思えばいい，という考え方もあるかもしれない。しかし，原語の意味と日本語での意味と両方覚えなくてはいけないのは，どう考えても非効率的である。その分のエネルギーと記憶容量（頭の）を他の知識に振り向けたいと思うのは私だけだろうか。日本人が英語が苦手なのは，こうしたいい加減なカタカナ語の氾濫に一因があるに決まっている。

Re-

ところで，上記「ナイーブ」で違和感を覚えた読者もおられると思う。私はこの言葉を英語本来の「世間知らず」という意味で使ったのだが，「感じやすい」，「傷つきやすい」といった意味で使う日本人も多い。それは sensitive である。これも昔の話だが，sensitive を「ナイーブ」と訳してあるアメリカ漫画の対訳本を見た記憶がある。訳者は「ナイーブ」が日本語として定着している（「感じやすい」という意味で）と考えて使ったのだろうが，間違ったカタカナ語が広まるのに加担しているようなものだ。

Re-

第１行目の「マンション」は有名な例なので先刻ご承知の方も多いと思われるが，日本のマンションはアパートに過ぎない。Mansion とは大邸宅のことである。ディズニーランドの「ホーンテッド・マンション」を思い出してほしい。

こうした和製英語はインターネットが普及し，グローバル化が進展すれば消えて行くのではないかと思ったのだが，全然そんな気配はない。ホームページ，ウェブサービスなど，原語とは意味が異なる新しいカタカナ語がどんどん誕生している。念のため，home page はウェブサイトのメイン・ページ（日本で言うところのトップページ）のことであって，あらゆるウェブページをホームページと呼ぶのはおそらく日本だけである。トップページという和製英語は階層構造を連想させるが，ウェブのハイパーリンクは上下関係を示すものではないはずで，その意味でも私はこの言葉が好きではない。ウェブサービスについては，ウィキペディアあたりで本来の意味を確認していただきたい。

Re-

さて，以上の話は図書館と何の関係があるのかというと，実は何もない。しかしそれでは図書館報の原稿としてあんまりなので，無理やりこじつけることとする。

首都大学東京図書館本館では，3年前，館内をレノベーションしてラーニングコモンズを設置した。幸い好評を博し，以前に比べ入館者数は大きく増えている。学習相談に応じるスタディアシスタントも常駐。グループ学習や研究発表に最適なプレゼンテーションルームやグループスタディルームは予約（レザベーション）可能である。大いに活用していただきたい。ご不明な点は何なりとレファレンスデスクにお問い合わせを。

と，出来の悪い三題噺が完成したところで，お後がよろしいようで。